



教職大学院 Newsletter

No. 148

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.8.2(公開版)

福井大学連合教職大学院 東京サテライト、 開校一年を迎えるにあたって

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科 東京サテライト代表 特命教授 福島昌子

はじめに

新型コロナウイルスへの感染拡大防止策として、都府県に3度目の緊急事態宣言が出され、昨年度に引き続き、多くの子どもや大人たちが予期せぬ事態に直面している現状にあります。しかし、今までであれば「非常事態宣言」と聞くとやや緊張する気持ちもありましたが、そのことばに耳が慣れてしまっている国民も少なくないのではないのでしょうか。そのようなところで、この4月から「児童生徒向けの1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、誰ひとり取り残すことなく公正に個別最適化された創造性を育む教育を、全国の学校現場で持続的に実現させる」といった令和時代の学校教育スタンダード、「GIGAスクール構想」がスタートしました。ただでさえ、多忙感がぬぐえない日々を過ごし働き方改革が問われるなか、学校の先生方にそれらに対応したスキルを磨き、新たな視点をもって学校教育を切り拓いていく時間がどれだけでもterるのでしょうか。

しかし、その一方で、Society 5.0時代を生きる子どもたちにとって、教育におけるICTを基盤とした先端技術の活用は必須といえます。だからこそ、今ま

で以上に教師や学校が他校との情報共有、協働・連携を図り、共に直面した教育課題と向き合いながら、教師力、教育力、授業力、教職力を磨き、互恵的に成長していくことが求められるといえます。

1. 東京サテライト、2年目のスタート

さて、昨年度の4月に令和2(2020)年度福井大学連合教職大学院のサテライトが東京に開校され、一年が経ちました。この東京サテライトは山手線の内側(大塚)にあり、東京駅から20分と交通の便も良く、研究室がある展望コミュニティ・ラウンジは、院生の方たちも自由に利用することができます。このラウンジは、人と人をつなぎ、コミュニケーションと協働を可能とする様々な工夫が至る所に施された創

内容

- 巻頭言 (1)
- 東京サテライトの一年を振り返って (5)
- 院生自己紹介 (15)
- スタッフ自己紹介 (21)
- 東京ラウンドテーブル資料 (24)

造性豊かな空間になっています。また、カンファレンスは、板橋区教育支援センターの研修室を借用して実施しております。昨年度は、コロナ禍で借用できなかったときは、院生さんたちは大塚のコミュニティ・ラウンジを使って参加をされていました。この東京サテライトは、福井大学連合教職大学院にとっても初めての分校であり、福井が行ってきた「拠点校方式の教師の学び」を東京という立地の利便性を生かし、関東や全国の先生方、学校、教育機関に向けて教師の新たな支援組織を展開することが目的に開校されました。



東京サテライト（コミュニティラウンジ）

その東京サテライトも有難く令和3（2021）年度の開校2年目で、すべての学校種（国公私立で、幼稚園、小学校、小中一貫校、中学校、中等教育学校、高等学校）の先生方、教頭先生、校長先生、教育委員会の所長さんなどが在籍され、M1とM2の院生を合わせると14名のミドルリーダー養成コース、学校改革マネジメントコースの先生方が在籍しております。その先生方は、関東各都県（千葉、埼玉、神奈川、東京）はもちろんのこと、新潟県や富山県、沖縄県離島の宮古島、多良間島から飛行機を乗り継ぎながら東京会場で学ばれています。そういった意味では、東京サテライトは地域空間を越えた教師や学校の協働探究の追求ができる可能性を秘めている拠点といえます。

先日、4月24、25日に開催された4月カンファレンスでは、M1、M2の院生同士が初めて顔を合わせ（開講式はZoom開催）、今まで7名だったM2院生にとっては、新たな仲間が増えたことの喜びがあり、また

不安と緊張、そして期待に胸をときめかせていたM1院生とで、今までにない雰囲気の空気感でカンファレンスが行われました。また、その日は福井大学から2名の先生方が来られる予定でしたが、残念ながら福井大学内の諸事情により、来ることはできませんでした。そのため、一人で14名の院生をサポートする覚悟をもったところでしたが、この4月から東京サテライトを中心にかかわってくださるコーディネーターリサーチの宮古島の平良善信先生、東京の前田香織先生のお二人が、初めての参加にもかかわらず、院生の学びを丁寧にサポートしてくださいました。そして、2日目には玉川大学の石井恭子先生もいらして下さり、今年度はじめての月間カンファレンスを無事終えることができました。

何よりも頼りになったのが、M2院生の存在でした。これまで東京の専任教員は（福島）一人ということもあり、より一層に自主性、主体性が育てられ、今年度（令和3年度）の東京サテライト院生の目標でもある「ファシリテーターの力を身につける」がごとく、2日間のすべてのcycleのファシリテーターを順番に見事にこなしてくれました。東京サテライトに非常事態宣言は発令されていないものの、この非常事態にM2、M1院生の団結力で乗り切れたといっても過言ではないと思っています。

また、今回のカンファレンスで印象に残った院生さん同士の対話がありました。それは、宮古島の下地美和子先生がご自身の「3つの種」の話をされた後に、東京の堀井優先生が言われたことです。「学校種も違い、困っている環境もその困り感も全く違うけれど、子どもの自己肯定感が低いということは自分の学校も同じことが言える。それはただ単に地域性からくる環境の影響だけでなく、教育の根本的なところに原因があるのかもしれない。それは共通の課題だと思う。」と述べられました。この対話を聴き、わたしが思ったことは、まったく異なった環境（文化、歴史、思想、地域など）にあったとしても、沖縄の離島（宮古島）と東京という地域性を超えて、教育の本質に目が向けられた瞬間だったと感じました。これは、教師として異なった学校環境の時空間を往還し共有した

ことで、自校の教育、自身の教育観を客観的に、そして対照的に捉えることができたのだと思います。その学びが各テーブルで展開されていた気が致します。それが、東京サテライトの学びそのものなのです。



4 月 カンファレンス (2021. 4/25-26)

2. 東京サテライト・ラウンドテーブルの開催

テーマ:「ICT で探究と協働はどう育まれるのか?」

令和 2 (2020) 年 11 月 21 日 (土) に板橋区教育支援センター研修室をスタッフの本部会場として、第 1 回東京サテライト・ラウンドテーブル (以下、RT) を Zoom オンラインで開催致しました。これまで福井大学が開催してきた RT と大きな違いは、企画・運営のすべてを院生が実施したということです。その目的は「教師としてのネットワークを広げてつなげる」「院生の力量アップ!」としていました。しかし、実はそれ以外にもねらいがあり、本来の連合教職大学院の「教職大学院で得た学び (知識) を勤務校で実践する」という目的から、それにプラスして「教職大学院で培った実践力を勤務校で速率的に生かす」を加えた東京サテライト独自のねらいを立てていました。その理由は、大学院在学中に自校の同僚と異なった多種多様多層の仲間たちと共に教育の問題・課題に向き合い、協働探究を実践することで「理論と実践を融合した実践力」を身につけてもらいたいという願いがあったからです。ただ、こうして言葉でいうことは容易いことですが、院生にとっては日々の業務でさえ多忙の中で、ただならぬことだったと思います。実行委員長を務めてくださった M2 の大井先生が本ニュースレターのご自身の振り返りの中で、東京サテライト RT について触れられて執筆をされております。

そのため、ここでは詳細は省略いたしますが、そのときの記録を少し記させていただきます。

< 福井大学東京サテライト RT の記録 >

・第 1 回: 5 月カンファレンス終了後 (Zoom ミーティング 16:30~17:30)

RT を院生が主体となって教員 (福島) と協働で開催することの確認を行う。

・第 2 回: 6 月カンファレンス終了後 (対面式: 板橋区教育支援センター、6:30~17:15)

実行委員長: 大井先生 (東大附属中等教育学校)、副実行委員長: 對比地覚先生 (東大附属中等教育学校) に決まる。大井先生、對比地先生と福島とでミーティング前に打ち合わせを行う。

・第 3 回: 8 月集中 Cycle3 (8/11 昼休みランチ Zoom ミーティング 12:00~13:00)

主題テーマの候補を検討する。自分たちが学びたいこと、現在、問題意識をもっている学校教育活動、授業、生徒指導などを挙げ、それと同時に社会で注視されている教育課題について各自意見を述べ合う。

このようにして主題テーマが絞られていきましたが、どうしても身近な自校の教育課題にテーマが焦点化され、視野を広げられないところがありました。そのため、全員で福井 RT の第 1 回から近々までの開催されたチラシを全て調べ、RT 開催および各 Zone の趣旨を確認し、全国の国立大学が主催したシンポジウムテーマや趣旨を調べたりもしました。また、テーマ決定にあたっては「国立大学の大学院であること」「タイムリーなテーマであること」「東京であること」「主催者、参加者が共に学び合えるラウンドであること」を必須条件として、RT 開催までに 8 月中旬から毎週 1 回水曜 17:00~19:00 まで Zoom ミーティングを行いました。それ以外にも、Slack というパソコンのチャットソフトを利用して、担当者間のグループ討議や全員での情報共有をそのソフトを通して繋がり活動をしてきました。

影で支えてきた者の勝手なものの言いですが、「学校種の特徴の差が際立ち、すべてが大変、でもそれがいい

い」、そしてチラシは「テーマは自分たちの顔、本の帯と同じ」「概要は人を選ぶ、最も大切に時間をかける」「レイアウト、カラーは主催者の姿勢やイメージ、丁寧に！」を言い続けてきました。企画・運営面では、院生の経験不足だったり、それぞれの思いが伝わらない歯がゆさであったりと困難なことがたくさんありましたが、回を重ねるごとに本当の仲間となっていくたといえます。嬉しかったことは、副実行委員長をされた東大附属の對比地先生のことばです。東大附属で初めて研究部長を務められ、コロナ禍で Zoom オンライン公開研究会を開催されたそうです。東大附属の公開研究会はかなり規模が大きいこともあり、今回の東京サテライトの経験が大いに生かされ、大変役に立ったと感謝されました。

本ニュースレターの最後にラウンドテーブルの資料として、東京 RT のチラシ、開催前に実施したアンケート集計結果等の資料を掲載してあります。ご覧いただけますと幸いです。そして、RT を当日まで支えファシリテーターをお引き受けくださった福井の先生方に感謝いたします。

3. 長期実践研究報告会に寄せて

東京サテライトの第一期生は M1 院生 7 名ですが、福井を拠点とされていた M2 の東京都板橋区立上板橋第二中学校の大野先生が東京サテライトが開校されたことで、6 月に拠点を東京に移されました。したがって大野先生は M2 第一期生であり、東京サテライト修了第 0 期生ということになります。学ぶ見本がないところでスタートした M1 院生にとって、たった一人でしたが、大野先生は様々なことで頼れる大きな存在でした。そこでも、やはり M1 院生の関心は長期実践研究報告にどう執筆するか（取り組むか）にあるようです。そのため、昨年度末の 3 月 27 日（土）午後に板橋区教育支援センターで「第 1 回 長期実践研究報告会」を開催いたしました。そこには中川センター所長さんも参加してくださり、M2 大野先生の取組について、また東京サテライトの一年間の

学びについて、次のことばを報告会で述べてくださいました。

「教職大学院というと、『新しい教育を生み出すところ』とこれまでずっと思っていた。しかし、自分の認識を福井大学は見事に覆してくれた。こんなにも実践的に学校教育現場に密着した学びを展開しているとは思わなかった。一人の教師が変われば、学校、そして地域、日本、世界が変わるということ。東京サテライトの先生方は、本当によく学んでいる、学び続けている。素晴らしい！」と。センター長の中川先生によって自分たちの学びが価値づけられた院生さんたちは、ほんの少し誇らしげだったように映りました。

このあと、M2 の大野先生から御自身の長期実践研究についてパワーポイントで報告がされ、続いて M1 院生から「一年間の学びの振り返り」が発表されました。大変活発な質疑応答がされ、有意義な時間となりました。

おわりに

一年前（2020 年）の 2 月には、福井大学の「ふ」の字もなかった東京に、福井大学連合教職大学院の東京サテライトが開校され、2 年目の現在、板橋区教育委員会と協定が継続され、遠く 1,838 km 離れた沖縄県宮古島とも新たに協定が締結されました。そして、この 4 月には在籍する院生が 14 名になりましたが、はじめ 7 名の院生たちとスタートした時は、自分一人では何ができるのか、ましてこのコロナ禍でいつも悩んでいました。唯一、思い続けたことは本校である福井大学の学びの質を落としてはいけない、分校だったとしても院生の学びを保障しなければならない、ただひたすらそればかり考えていたように思います。

こうして東京サテライトが芽吹き始めたのは、私が悪戦苦闘していたからではなく、一人一人の院生さんが「学ぼう」「学びたい」という思いを強く持ち、学ぶ集団へと変容していったことが東京サテライトを支えている揺るぎない源になっているといえます。

令和3(2021)年の予定としては、夏期集中 cycle (b) 8月1日～3日は宮古島で実施し、宮古島の管理職の先生方も参加し共に学ぶ予定です。現在、その段取りを進めています。そして、8月4日に初めて宮古島RTを宮古島教育委員会と東京サテライトの共催で開催し、宮古島の院生と他の東京サテライト院生とで企画・運営を行います。そこでは物理的、心理的な距離を超えて新たな学び合いが生まれると大いに期待をしております。もちろん第2回東京サテライトRTも開催を予定しております。また、この他にも関東圏内の教育委員会との連携した学習支援組織の構築を見据え、そのネットワークを結ぶべく術を模索しているところでもあります。

まだ、走り始めたとは到底言えませんが、確かな歩

みを一步一步踏みしめ前に進み始めたことは確かです。私は院生さんの最後尾を歩き、わたしより後ろに落ちることが無いう、この先も笑顔を絶やさず支え続けてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、昨年度に右も左もわからない中を対面式カンファレンスでは、福井から毎回サポートに来てくださった木村先生、半原先生に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

そして、皆さんにこう伝えたい。「令和3(2021)年度、東京サテライトの教師の(教職)総合学習は、これからが本番です」と。

カンファレンスでみなさまにお会いできることを大いに期待し、楽しみにしております。

東京サテライト 一年を振り返って

東京サテライト開校1年目、共に学び合った2年生の院生の振り返りです。

東京(大学院)で学ぶことの意味

ミドルリーダー養成コース2年／新潟県燕市立分水中学校 **牛腸つぐ実**

私の住まいがある新潟県は、福井県と同じ北信越にある。私にとって福井県は何かと縁がある県であった。だが、東西に長い新潟県を抜け、福井県に行くには時間がかかる。我が家から福井大学文京キャンパスまでは、有料道路を使っても6時間程度かかり、電車を使用すると、新幹線・特急を使っても4時間30分以上の時間を要する。その福井大学の大学院生になると決まった時、大変なのは分かっていたが嬉しさの方が勝っていた。そして、その大学院に東京サテライト校が開設されると聞いた。我が家から東京までは、車と新幹線を使って2時間。私的なことを言わせていただければ、東京には家族がいるので、しょっちゅう出かけている場所であった。東京は遠いよう

で近い場所と感じていた。同じ学びをさせていただけるのであり、選択することが可能であったので、私は東京サテライト校で学ばせていただきたと考えた。

福井大学にはセカンドキャンパスが全国に何カ所もあり、東京では新宿校があることを知った。入学前ではあったが、すぐさま住所を調べて行ってみた。大都会の中にある新宿のセカンドキャンパスはとても魅力的であった。そこでの学びを想像してワクワクしていた。ところが、学びの場所は違うところが準備されていた。板橋区教育研修センターの研修室である。福井大学と板橋区教育委員会が連携しているのは、入学前に参加したRound Tableで知っ

た。その板橋区の全面協力のもと、私たちの学びの場所が用意されるというのだ。「すごい！福井大学の考えることはすごい！」と、学ぶことを許された私は、ただただ嬉しかった。そして大塚のオフィスの存在を知った時も驚いた。大塚のオフィスは、いかにも都会のビルの一角であり、写真映像はテレビドラマに出てくる夢のような場所であった。また「一期生」と言われることも、何ともくすぐったいような嬉しさを覚えた。私たちがパイオニアとして、この学びを継承し発展させていくことができるのだろうか。責任感より心地よい高揚感を覚えていた。

だが2020年度の始まりは、世界中が新型コロナウイルス感染拡大防止のため、大きな変革を余儀なくされた。新潟県の小中学校の職員には県外への移動許可が降りなかった。新潟県では徹底した感染防止対策をとっているため、他の都道府県の方々には到底理解できないような制約が課せられている。そのことが私の学びの方法を変え、大学院での最初の授業は、ICT機器を利用したオンライン授業となった。私はICT機器の操作が苦手である。もっとも、私の年齢の大半の人は苦手である。だが大学院の様々な手続はICTでおこなわれる。今はそういう時代である。苦手意識をもちながらの操作は、今自分がやっていることの全貌が見えず、立ち位置が分からずにいた。もともと優秀である同級生達が更に力を付け、着実に成長していく中で、私はただ羨ましく思うだけで何もしないでいた。そんな中、緊急事態宣言が解除され、7月のカンファレンスで初めて板橋区教育研修センターに行くことができた。同級生と呼べる方々はZoomでお目にかかっていたの

で初対面ではなかった。だが実際にお会いした姿は、思ったよりも背が高い方、思ったよりも話やすく人懐こい笑顔の方など、パソコン越しで受けた印象とは違うものであった。そしてカンファレンスでは、近くにいることで空気感のような物を感じた。同級生達の優秀さをZoom以上に痛感させられた。その同級生や大学院の先生方に、疑問に思ったことを直ぐに聞けて、実際に対面して学習することの利点を痛感させられ「また東京（大学院）に行きたい。」と強く思うのであった。

その後、2度目の緊急事態宣言が出され、私は独り新潟の地で学びを進めることとなった。孤独感が否めない中、私を気遣い福島昌子先生他、大学院の先生方や同級生の方々が声をかけてくださった。つい半年前までは名前も顔も知らなかった方々がほとんどであるのに。また「東京 Round Table」のための準備でも、一度も東京へ行けなかった。本来なら落ち込むところであるが「また東京（大学院）に行きたい。」と言うPositive Thinkingを持ち続けられたのは、他でもない私たち院生を支えてくださった方、東京サテライトに関わってくださった多くの方々のお陰である。心から感謝の意を表したい。

2度目に行けた東京は「Round Table」当日であった。その後も対面ができない日は続いたが、オンラインとオンサイトの良さを見つけながら、新しい時代の学びに自ら身を投じて行けることを楽しみたいと思う。この1年でおこなってきた協働・探究を更に続け、省察を繰り返しこれからも学び続けていきたい。そして「福井・東京に実際に行って学びたい。」と思うのと同時に、少しはICT機器の操作ができる教師を目指したいものだ。

東京サテライトキャンパスでの出発

ミドルリーダー養成コース2年／カリタス幼稚園

西川くるみ

私の勤務するカリタス幼稚園では、母体であるカリタス学園が福井大学教職大学院との間で院生派遣に関する協定を締結し、2015年度より各校種から教

員が派遣されるようになりました。幼稚園からも、2016年度から教員が教職大学院に継続的に通い始め、私は3人目の派遣となります。副学長の松木健

一先生には、元々小学校の研究指導講師として長年ご指導いただいたご縁から、学園全体の研修に携わっていただき、年に1度全教職員が集まって行う学園研修会の全体会で講話をしていただいております。

学園を上げて教員を派遣する意味は、建学の精神に則って教育活動を行う一貫校でありながら、各校種の特色に一貫性が感じられないという課題を乗り越え、一貫教育と呼ぶにふさわしい道筋を作ることにあります。実際、教員の派遣が始まってからは他校種との交流が徐々に始まり、お互いの教育活動を見合っつながりを意識するようになりました。各校種の院生を経験したメンバーで「教育改革分科会」が持たれ、各校種の具体的な取り組みが建学の精神をどのように具現化しているかを分かち合い、全体を俯瞰して一貫性がスムーズに保たれるよう努力するチームも結成されています。

神奈川県にあるカリタス学園から福井に通うためには、金曜日に出発しなければ間に合わず、多忙のなか仕事を切り上げて前泊する必要がありました。先輩院生の言葉にも、同僚からの言葉にも「なぜ、福井なのか」という率直な疑問も生じていました。2020年度から東京サテライトができるとのことで、喜んで東京サテライトに所属することを決めました。何よりのメリットは、移動による体力の消耗がないこと。カンファレンスに参加して気持ちの上ではパワーをチャージしていても、休養できずにフラフラといこともなく、家族との時間も大切にしながら充実した時間を過ごさせていただいています。カリタス幼稚園では、以前から福井大学の先生方に公開保育研究会などでお世話になっており、幼稚園の成長の過程も見いただいています。園内研修および公開保育研究会は引き続き福井から松木先生、荒木先生はじめ諸先生方にご指導いただきながら、私自身の（もちろん職場に還元される）学びは東京サテライトを拠点とさせていただいております。

東京サテライトでは、福島先生が院生の面談を実施してくださり、自身の研究課題や取り組みについて相談し、振り返る機会をいただいています。私は発達土台としての身体づくりに関心があるのですが、体育科出身の福島先生からのアドバイスはとても頼りになります。院生のメンバーも、国語科や体育科、理科等様々な視点から感想やアドバイスをくださり、幼児期はまるごと、という中でとても示唆に富んだ視点をいただきます。東京サテライト第1期生には、国公私立の幼小中高と様々な職場環境におかれるメンバーが所属しています。私自身、この場に来て初めて幼稚園やカリタス学園以外の他の先生方と知り合い、語り合っているわけですが、名前を知っている身近な学校だからこそ、その先生方が、素晴らしい実践を行い、同じように悩みや葛藤を抱えながら前進する姿を見ると、教育に携わることの尊さをあらためて深く感じます。第2期生にはさらに多様な地域、立場の先生方が加わり、色々な話をするのが楽しみです。

東京サテライトでは、昨年ラウンドテーブルを企画しました。自分の目の前の子どもたちのことを考えるのが精一杯だったのがついこの間。たくさんの熱意ある先生方が学びたくなるような、これからの教育を見据えて、実践に落とし込めるようなテーマをメンバーと企画し、参加者の先生方に助けていただきながら終えることができました。テーマ設定からチラシの文言の細部まで検討に検討を重ね、こうした研究会をつくることの苦労も思い知りましたが、大変勉強になりました。対外的な企画をするということも、東京サテライトならではの学びだと思います。

今年は2年目になり、もう半分が過ぎてしまいました。このままずっと続いてほしいと思うくらい充実した学びの時を過ごしています。東京サテライトに集う先生方の熱意に励まされながら、今年もよく学びたいと思います。

東京サテライトでの学修

～研究指定と大塚(サテライト)があることの意味～

ミドルリーダー養成コース2年／町田市立武蔵岡中学校 菅野 多岐子

昨年度より、教職大学院東京サテライト校での学修が始まった。その1年前より私は、学校外で学ぶ機会を得たいと強く思うようになった。それには理由があった。現任校への異動により授業数が減ったこと、学年主任となり担任を外れたことから、時間的な余裕が生まれたのだ。一方で事務作業が増え、職員室でパソコンに向かっている時間が増えた。そして、他教科の見学や自己の授業の省察を怠ってしまっていた。しかし、教員経験も10年を少し超え、比較的時間に余裕のある本校にいる間に力をつけなければ、ここで自分自身の成長が止まってしまうという焦りも感じるようになった。そこで、自ら研修会や教育系のイベントを探し参加するようになった。やがて、一人で参加してそこで終えてしまうより誰かとともに参加し、参加後に話をする時間を持つことは非常に楽しいものだ気づいた。さらに、誰かと共有したり、話したりすることはその研修について学び直す時間にもなるのだと実感した。私はその実感から、もっと継続的に学びたいと思うようになった。そのようなタイミングで福井大学教職大学院という場があること、そして学校拠点方式であること、さらに東京にサテライト校ができることを知った。当時の私は、不安よりも期待の方が大きく入学を希望した。

その時期と同じくして、本校が町田市教育委員会研究指定校としての打診を受けた。私が教職大学院に入学する年と、本校が研究指定校となる年が同じ、そして終わりを迎える年も同じという全てのタイミングが重なったのである。そこで、管理職には教職大学院への入学を希望していること、そのことが学校の研究に還元できるのではないかということとを相談した。管理職は快く入学を応援してくださり、今に至ることとなる。

本校は、施設一体型小中一貫校の11年目に入る年を迎える。また、前述した町田市教育委員会研究

指定校となり2年目を迎える。しかしこの10年、校種を超えて日常的に連携するという機会が少なかった。そこで、研究指定校となった年度の第1回目の校内研では、三田村先生と福島先生をお呼びして、「9年間で育てたい児童・生徒像を共有」することの大切さをご教授いただいた。その後の校内研では、各自が思い描いた児童・生徒像について、校種を超えた小グループで語り合った。これまで、自分の思いを誰かと語り合う経験のなかった本校の教員たちは、あきらかに戸惑っていた。それでも次第に互いの思いを語り合い、そして聞くことで目指す方向性を共有する機会となった。

さらに、その次の校内研では木村先生にもご来校いただき、生徒を見取る大切さについてご教授いただいた。そして2学期の研究授業では、生徒の見取りを中心に据え、協議会では自分が見取った生徒について小グループでの語り合いを行った。授業者ではなく、生徒を中心に授業を見るということは容易ではなく、目の前の生徒の様子をメモするだけでも大変なことであった。ましてや、その生徒の発言や態度から変化を見取ったり、その生徒と他生徒との関わりや会話、教員とのやりとりまでを時系列で追ったりすることは難儀だった。その一方で、生徒を見取ることで自分の授業を省察することができるということに気がついた。さらに、生徒を通して授業を省察するには互いに授業を見合うことも必要だった。そこで、昨年度は研究部発信で日常的な授業公開・連携を全教員に投げかけることとなった。そうして、試行錯誤しながら生徒と向き合い日々過ごして行く内に、研究校として目指していく方向性が絞られてくるようになった。

教職大学院との繋がりができたことで、教員たちの研究へ向かう姿勢も少しずつ変化をしていった。今までやってきたことがないような校内研修での学びは、先生方の前向きな意欲を刺激することとなっ

たのではないかと思います。職員室でも校種を超えて生徒を話題にした会話や、小中で連携して授業に向かう教科も出てくるようになってきたのだ。そうやってきたのはきっと全教員で育てたい児童生徒の姿を共有し、校種を超えて会話をする機会ができたおかげだと思っている。私たちは、新しいことへ踏み出すのを恐れてしまう部分もある。知らないことを実践するのはどうなるのかが見えない分、不安も大きくなってしまふこともある。しかしそのような時、感じている不安や疑問を言い合える同僚性や校内の雰囲気、そして気持ちを受け止め前に進むためのヒントをくれる大学院の存在は大きかったと思う。

このような取り組みに至るまでの過程で、東京サテライト（大塚）の存在は、研究部の部員をはじめ私にとって大きな支えとなっていた。研究校となった当初は、全てが手探りで研究テーマを決定するどころか年間の見通しもままならない状況にあった。自分たちでは突破口が見えず、どう進めていけば良いのかを教授に相談をしたいと思った時、電話

やメールとは違い直接教授と顔を合わせて相談できる場が身近な場所にあることは心強かった。またこの大塚サテライトオフィスは、学校という場とは大きく異なり、都会的でお洒落なラウンジを使用することができた。場所が変わると気分も変わり、行き詰まっていた頭がすっきりし整理整頓されるような気持ちにすらなつた。私自身は研究校としての相談に限らず、自分の長期実践報告の相談にも頻繁に訪れるようになった。そうした院生である私の気持ちを福島先生も快く迎え入れてくださった。

今年度、本校は研究指定校として集大成の年を迎える。私もまた教職大学院卒業の年となる。目の前の生徒のために、必要な支援を大人の協働も図りながら取り組んでいきたい。その一方で今後も悩んだ時、相談したい時、教授と顔を合わせてお話をさせていただきたい時、リフレッシュしたい時に幾度となく大塚サテライトオフィスを訪れることだろう。そして迎え入れてくれる教授に感謝し、残りの教職大学院での日々を邁進していきたい。

「伴走者」と共に歩む

ミドルリーダー養成コース2年／富山県立魚津工業高等学校

伊井昌彦

今回、長期実践研究報告会に参加して最も感じたことは、対面の学びの良さである。大野豪先生のご報告を直に拝聴できたことはもちろんだが、他の院生たちの意見を聴き一緒に学びの場を創り出せたことは、大野先生へのはなむけの意味でも意義ある会であったと思う。指導していただいた福島昌子先生には心より御礼申し上げたい。

さて、大野先生の長期実践報告「学びを拓く“探究するコミュニティ～福井大学教職大学院での「学び」とチーム上二中での「実践」～」では、勤務校の教育改革を大学院での学びから得られた知見をもとに進展させる過程が丁寧に語られている。私の心にとりわけ残ったのは、大野先生が手がけた数々の実践もさることながら、それらの土台となる「思い（価値観）」である。

（報告書P1より引用）

「宮田校長先生：「大野さん、上板橋第二中学校の誇れるものって何だと思う？」

大野：……。私は、とっさに考えたが答えが浮かばなかった。）

宮田校長先生：「私は上二中の生徒や保護者、教師、地域の人が上板橋第二中学校はこういう学校です。と自信をもって言える学校にしたいんだ。」

本校校長宮田先生との対話と、教職大学院に入学する前のポスターセッションでの福井県の至民中学校のある生徒との対話を思い出す。

大野：「学校は楽しい？」

至民中の生徒：「はい、自分で考える授業が多く、信頼のおける先生がいて、何でも話せる友達がいるこの学校が大好きです。」

また、緑豊かな自然があるのもこの町の自慢です。

どこの学校でももつべき理念が、この学校には確かにあった。その理念を先生が語り、生徒が体現し、共に考え、探究し、行動していく。その理念に基づく実践の象徴といえる教育活動が「クラスター制」であり、教職員の「協働研究組織」であり、至民中の伝統を築いていく糧となっている。そして、いつしか私も、上板橋第二中学校の誇れるもの、これから目指すもの、それが何かを考えるようになったのである。」（引用終了）

私は大学院1年間の学びの中で「教員の教育活動・実践も探究活動である」との認識を持つようになってきている。なぜなら教育現場に山積する課題も正解のない問いであり、その対処が教員たちに委ねられていると考えるからだ。コロナ禍についてはいうまでもなく、21世紀を迎え社会構造の変化が学校運営や教育活動に質的な変化を求めている。その内容や手段、目的は多様であることから、教員・学校は育てたい生徒像や学校像を持って日々取り組む必要がある。いわば自身の「発意（思い）」に基づいて実践を展開し積み重ねていかねばならない。

また、大野先生は校長先生との対話の中でそのスタートラインに立ち、同僚の先生方を巻き込みながらいくつかのプロジェクトを進行させているが、重要なのは先生方がどんな課題を抱え、どのような方策や手段でどのような目標に近づこうとするのか、対話を通して共有し協働する体制を築いていったことだ。

（報告書P9より引用）

「第1回目の研修会では、私が福井でどのようなことを学んでいるのか？また、我々は、これから何を目指していったらよいのか？を上二中の全教員で共有することが目的であった。そのため、私は、福井大学でのカンファレンスやラウンドテーブルで、福井大学の先生が講義形式で何かを教えてくれるのではなく、実践を語り合い、対話を通して、何かのヒントを自分で掴むものだとして全体に報告した。そこで私たちが考えたことを実践し、省察し、「発意→

構想→構築→遂行・表現→省察」を繰り返し、我々が学び続けることが生徒の成長につながるという話をした。その上で、先生方には「3年後の上二中の生徒は、どのような姿になってほしいか？（教科センタースタートの時）」を先生方お一人お一人に考えてもらった。その結果、「生徒たちが生き生きと活動する」ひいては「自ら学ぶ生徒」という我々が目指すべき「共有ビジョン」をもつことができた。それに伴って令和元年の研究主題を『自ら学ぶ生徒の育成～学力向上に向けた「読み解く力の育成」～』とした。ここで、全教員が教科センター方式を目的ではなく、手段として捉え、生徒の学びの姿こそ我々の目指すべきことだと確認できた。また、その後は、研究主題に対して先生方一人一人の授業の工夫点を、他教科の先生と4人1グループで話し合いを行った。そこでは、生徒が主体的に学べる授業の工夫について話し合い、今年度、学校全体として取り組んでいくこととして、「班活動は4人1グループで行うこと」「ホワイトボードを活用すること」「子どもたちにアンケートを取り、学びの変化を見取ること」という3点が決められた。私のグループでは、「読むこと」「書くこと」「教え合い」「課題の設定」が大事であるという話になった。異学年、異教科のメンバーで話し合えたのは、コミュニティを形成する上でとても大きなことだと感じた。また、3年後の教科センター、そして研究主題に向けて、全教員が考えるようになったこと、なにより教員集団が少人数の形で話し合い、それぞれの思いを伝え合えたことに大きな手ごたえを感じた研修会であった。少しずつ進化を前提とした設計になってきている。」（引用終了）

大野先生の2年間の実践の手ごたえは、報告書の最後に以下のとおり描かれることになる。

（報告書P83より引用）

「上板橋第二中学校は、公立中学校のため、毎年教員の人事異動が行われる。今いる教師も何年後かに上板橋第二中学校を異動する。そして、その度に、新しいチーム上板橋第二中学校が生まれる。それゆえに「公立学校の学校文化の継承は極めて難し

い」と言われる。しかし、私は決してそうは思わない。なぜなら教師と生徒が担っている中心的役割を次の世代の人へ受け継ぎ、それを支える協働の姿（システム）が上板橋第二中学校には根付いてきていると思うからだ。そのような協働のシステムが、新しい世代の人へと伝統、文化を継承する。そして、新しい世代の人たちが今の伝統をさらに良いもの書き加えられれば良いとも思っている。」（引用終了）

このように書くと順風満帆に実践が積み重なったようであるが、もちろんそうではない。報告会で大野先生は、「教員は授業者としてどうしても授業手法にこだわる傾向（癖）があり、研究授業などでも授業者視点の分析に終始してしまう。生徒の学び・変容を見取る視点を持つという意識づけに大変時間がかかった」と実情を語ってくださった。その契機となったのが第2回校内研修会で教職大学院の半原先生に執筆なされた授業観察記録である。そこには、一人の生徒に注目し発言や様子から授業でどのような学びを得たのかの「見取り」が記されている。学びのプロセスを重視することの意義が明確になったことで、学習者を支える役目を担う、目指す

べき学校文化の基軸が示されたと言えるのではないだろうか。そうした意味で教職大学院は拠点校の学びを支える存在である。

大野先生の報告は、学習指導要領が示す学びの実践に向き合う教員に多くの示唆を与えてくださることと思う。そこには生徒の学びに真摯に向き合い、課題を共有して対話を重ね協働し、真正の学びに向かおうとする生徒たちを支える教員たちの姿がある。振り返って自身の立ち位置を考えた時に、勤務校で教員間の課題共有と対話をいかに生み出すかが問われるのだらうと思う。ある意味、この長期実践も探究のプロセスに他ならない。他の院生の先生方も1年間の実践を終え、それぞれの立場や視点で省察し2年目の展望を語っていらっしゃった。「授業第一」「民主主義的活動」「小中連携」「異なる学びの場」など、これまでの取り組みや教員としてのアイデンティティが、生徒や同僚教員、他校や地域、教職大学院との関係の中で立ち現れたり少しずつ変容したりと移ろいゆく様を捉え意味づける営みは、今後の教員生活や人生そのものを歩む土台となるであろう。対面で行われた長期実践報告会は、そうした道のりを歩む先達や同志が「伴走者」として確かにここにいることを教えてくれたと言える。

〈教師文化〉の文化接触の場としての東京サテライト

学校改革マネジメントコース2年／保善高等学校 三保谷遼

福井大学連合教職大学院東京サテライトで大学院生として学んでいるということを話すと、多くの人は狐につままれたような表情を浮かべる。そして、「どうして福井？」とか、「先生の出身は福井でしたっけ？」といったような質問が寄せられる。そこで、「東京にサテライトができたもので」とか、「母方の故郷は富山です。福井にはかつて親戚が住んでいたぐらいです」などと返してみる。すると、何も煙に巻くつもりはないのだが、往々にして相手はより困惑した面持ちになってしまう。そこで、「休職せずに現職を続けながら学べるから」と補足したり、「福井は学力全国トップなので」とつけ加

えたりすることで、やっと納得してもらえる。この1年で何度となく経験した場面だ。

ただ、これらの問答はどちらかというと「福井大学連合教職大学院」に関心が焦点化されていて、「東京サテライト」の特性や意義をめぐる関心は周縁に置かれているといえる。そこで、拙稿では関心の焦点を「東京サテライト」に移して、稿者たちの所属する学び舎「東京サテライト」の特性や意義について考えてみたい。

手始めに「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という名称には、福井と東京という2つの土地が含まれていることに注目してみる。すると福井と

東京の教師集団が地域を越えた学びを展開していくことが想像できる。ここでは仮に〈福井×東京の学び〉と称しておく。ともあれ、異なる地域を背景に抱えた教師集団の協働的な学びが、「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という命名によって宿命づけられているといえるだろう。

〈福井×東京の学び〉の意義は大きい。なぜならば、東京一極集中がさげられる今日にあって、その東京の教師集団が地域を越えた学びを経験することは、自分たちの置かれている場を相対化し、省察する貴重な機会を提供してくれるからだ。実際、稿者たち東京サテライトのメンバーは、カンファレンスやラウンドテーブルなどを通して出会う福井の教師集団から多くのことを学んできた。いわば「福井大学連合教職大学院東京サテライト」の存在によって〈福井の教師文化〉と〈東京の教師文化〉の文化接触が起きている。そして、その帰結としては〈東京の教師文化〉に変容がもたらされる可能性も見いだせることだろう。

一方に、「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という名称が与えられたことによってかえって見えにくくなっていることもある。先程来、稿者は何の断りもなく「東京の教師集団」という文言を用いているが、これは実態と乖離している。現在、東京サテライトに所属しているメンバーの勤務する学校は新潟・富山・埼玉・千葉・神奈川・沖縄・東京と7都県に及んでいる。したがって、ここまで用いてきた「福井の教師集団」と「東京の教師集団」という構図は、「福井の教師集団」と「7都県の教師集団」という構図として修正したほうがよい。あるいは〈福井の教師文化〉と〈7都県の教師文化〉の文化接触ともいえる。また、「福井大学連合教職大学院東京サテライト」に学ぶ「7都県の教師集団」は〈7都県の教師文化〉どうしの文化接触も経験していることも指摘できる。したがって、先に示した〈福井×東京の学び〉は〈福井×新潟×富山×埼玉×千葉×神奈川×沖縄×東京の学び〉として修正されるべきだろう。

加えて東京サテライトのメンバーの職場は、幼稚園、小学校、中学校、高校、そして教育行政職まで多岐に及んでいる。国公立学校で働くメンバーもい

れば、稿者のように私学で働くメンバーもいる。だから東京サテライトは教育という営みをシームレスに様々なフィールドから見つめる機会に恵まれていると指摘できる一方で、これまた「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という名称からは見えにくい実態のひとつに数えてよいかもしれない。

ここで述べてきた理路は、西谷修の「名づけと所有」と題された文章（『理性の探求』岩波書店・2009年）をもとに着想したものであるが、西谷は名づけという行為について「その名で呼ばれることになる存在の在り方を左右する」と指摘している。そういう意味で「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という名称は、前述のようにメンバーの多様性を見えづらくしているところがあることに少しだけ気をつけたほうがよいのかもしれない。そして、その見えづらくなっているところに思いを寄せることは「福井大学連合教職大学院東京サテライト」の「在り方」を、全国の〈教師文化〉の文化接触の場として見いだすことにつながる。言い換えれば、「福井大学連合教職大学院東京サテライト」という名称が規定してしまう「在り方」を超えてより豊かな学びに開かれていくのだ。

結びに全国の〈教師文化〉の文化接触の場として「福井大学連合教職大学院東京サテライト」の「在り方」を共創していくうえで、個人的に大切にしたいと考えている視座に触れる。ひとつには、福井の教師集団が、稿者たち東京サテライトのメンバーから学ぶことがあったとすれば、何を学んだのかということだ。福井が東京サテライトとの往還を経てどのような省察があったのか。その諸相を学ぶことは、東京サテライトのメンバー自身が省察という営みを考えるうえで意義深いものになるだろう。

もうひとつは、全国の〈教師文化〉の文化接触の場として「福井大学連合教職大学院東京サテライト」の補集合、あるいは余事象への眼差しである。福井大学連合教職大学院や、その東京サテライトから広がっていくコミュニティだけが、日本の〈教師文化〉でない。私学人としては、やはりこの点に対する問題意識がある。そのコミュニティの外側にいる教師たちとの協働関係を展開していくこと。それは同僚性ということなのかもしれないが、「福井大

学連合教職大学院東京サテライト」の〈教師文化〉を相対化することも、時には必要になるだろう。

東京サテライトの特性や意義は、〈教師文化〉の文化接触の場として全国に開かれていることにある。そして、稿者は東京サテライトにおける文化接触を通して自らの帰属するところの〈教師文化〉を

とらえかえし、教師としてのアイデンティティを再構築するただ中にあるのかもしれない。「福井大学連合教職大学院東京サテライト」は、日本の教師のひとりとしての自分自身を省察し、実践を磨いていく場なのだ。

東京サテライト RT で学んだこと

学校改革マネジメントコース2年／東京大学教育学部附属中等教育学校 対比地覚

ラウンドテーブルの企画・運営を通して学んだことを端的に表現するならば、「自分で動いてみて初めて分かることが本当に多い」ということです。

教職大学院に入学する前に私が参加したラウンドテーブルは2014年春の実践研究福井ラウンドテーブルおよび入学前年(2019年7月)の奈良での研修くらいで、大学院生として参加した2020年6月を含め3回の経験しかありませんでした。それでも、現任校で毎年公開研究会の開催・実施に関わってきたので、こうしたイベントに向けて、どんな準備が必要で、何をどう決めていけばよいかのイメージはある程度もっており、他の東京サテライトの仲間よりはラウンドテーブルの企画・運営について多少は見えているつもりでいました。しかし、すべてが終わった今ふり返ってみると、ほとんど何も見えていないことに気付かないままかなりのスピードを出して進んでいたなあ、よくその状態で走ってきて大事に至らなかったなあという危なっかしさを感じています。

たとえば、日程が決まってすぐに行ったテーマ検討でのことです。私としては、コロナ禍による遠隔学習やGIGAスクール構想などで、ちょうどICTについて話し合うことは社会や教育界の動向としても時宜を得ており、参加者となりうる人の潜在的ニーズを満たすものであると考えていました。実際に自分たち(運営側)の中でも「話し合いたい」「学びたい」という声が多く上がり、前向きに話が進んで「ICTで探究と協働はどう育まれるのか」に早い段階で決まりました。しかし、もっと後の具体的なところを詰めていく段階になって、「福井大学」の看板に見合うだ

けのクオリティを保障しなければいけないことや、参加者の課題意識に応えられるだけの知識や経験知・ノウハウを“主催者として”自分たちが持ち合わせていないことを突き付けられ、焦り、大風呂敷を広げ過ぎたことを反省しました。「皆で協働しながら今より少しでも答えに迫ればいい」「実践を聴き合う中で一緒に学んでいけばいい」という気楽な構えは一参加者としては許されるが、企画する側としては、探究の場といえども参加される方の期待に応えるためには、ある程度の答え(の候補)を用意して臨むことが求められると教えられました。また、「ICTについては生徒の方が優れている面もあるので教師も生徒から学びながら実践を深めていくのがよい」とされる一方で、現実には生徒とフラットな関係で学ぶことへの心理的な抵抗(不安)が大きくあり、これから私たち教員はその課題にしっかり向き合い、克服していかなければならないことも学びました。

また、もう一つ学んだ大きなことは「もっとネットワークを広げる努力をしなければならない」ということです。それまで私は、それなりに広いコネクションを持っていると思っていました。しかし、いざ知合いの人たちに参加してみないかと声をかけ始めてみると、義理や肩書に頼らずに誘えるインフォーマルな関係をほとんど築けていなかったことに愕然としました。またSNSなどでの発信も、多くのグループでメンバーが重複していることに気付き、数もさることながらお付き合いのある方々の分野や地域の狭さに課題を感じました。教育改革を進めていくには様々な方面からの協力が必要であり、幅広く太

い人脈をもてる努力をしていかなければ何一つ成し遂げられないと、今回のことで思い知らされました。

このように、「実践したからこそ見えてくるもの」の価値を肌身で知れたことが東京サテライト RT での一番の収穫だと思っています。余談になりますが、2 月に開催した勤務校での初のオンラインによる公開研究会を新米研究部長として無事に完遂できたの

は、この実践からの学びに依るところが大きかったと感じています。

4 月の開講式にて年間スケジュールをお聞きし、今年の東京サテライトでも院生ながら挑戦できる機会を様々に頂けそうなので、それらを自分の血肉に出来るよう、一つ一つの実践を丁寧に編み、捉え返していきたいと思います。

我々自身の学力の三要素を問う機会として ～東京サテライト主催ラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース2年／東京大学教育学部附属中等教育学校 **大井和彦**

東京サテライトが設立された初年度に、主催のラウンドテーブルを行うという企画が立ち上がった。昨年度東京サテライトの構成メンバーは現職教員 7 名、そのうち 6 名が M1 であり、ラウンドテーブル参加経験者は半数以上は 1 回程度であった。無謀と言え無謀とも言えたが、これは自分にとってもメンバーにとっても好機と直感した。それは、勤務校で公開研究会や研究授業等で披いていく中でのこれまでの私の中で大きな学びを得られてきたという経験の感覚から、やはり自分たちで自分たちの学びの機会を運営すること自体がメンバー全員の大きな学びになると思われたからである。

具体的には昨年度 7 月の月間カンファレンスから動き始めた。6 名のうち 2 名は自身の所属校での「公開研究会」を毎年経験しているため、運営のイメージは何となく持つことができたが、他のメンバーは、勤務校内でも研究会がそれほど行われていたわけではなく、運営委員長を名乗り出た私はその間をどのように繋げるかを考えながら進めていた。その際に、私が今の東京サテライトメンバーだからこそ大事にしたかったことは「校種不問で議論できるような話題にする」とことと、実施するからには「時機に沿いつつも福井ラウンドテーブルとは異なったテーマで実施してみたい」ということであった。しかし、運営協議開始当初は私のファシリテーションが

うまくなく、先生方を路頭に迷わせていたように思う。

テーマ決定に際しては、6 月の福井ラウンドテーブルで東京サテライトのメンバー全員が Zone に参加し、教育の「ニューノーマル」について考えたことが足がかりとなった。昨今の教育のキーワードとして「探究」と「協働」が挙げられるが、このキーワードはコロナ禍前から育まれてきたところがある。一方で、このコロナ禍で差し迫られての ICT 使用をせねばならなくなったところで、現場の教職員がなかなか困っているという現実を省みた時、これらを今後どのように融合させていけばよいのかということ率直に語り合ってみてはどうかという話になった。そして、そこから Zone 設定をどのようにするかを考え、幼稚園から大学までの校種による現状の異なりを踏まえ、四つを設けることとした（その思考の拡張をする際に「コミュニティ・オブ・プラクティス」の発想は大いに役立ったと感じる）。具体的には、以下の Zone を設定した。

①「教育の ICT 化による課題とうまく付き合う」（ICT 化によって現れた教員・子ども双方の課題についてどう向き合うか）

②「学校組織が乗り越えるべきことを考える」（学校全体としての ICT の取り組みをどう進めたら良いか）

③「ICTの長所・短所を理解し、使いこなす」
(そもそもICTそのものの理解をどう進めたら良いのか)

④「デジタルネイティブの内面を探る」(教員と子ども達とのICTに関する世代間格差をどう捉えるか)

実施内容を詰めていくために9月下旬以降は毎週定例のZOOM会議で情報の「同期」を行いながら、slackにて「非同期」のファイル交換と情報共有を併用した。しかしながら、こちらの思いの至らぬところも多々あり、お力添えいただいた福井大学教職大学院の先生方には数日前という直前までご面倒をおかけしてしまった。

教職大学院での我々の学びは、我々が学ぶ者で居続けることの意義を問うものだと個人的には考えている。そして、問い続けることが学ぶ者で居続けることと同義にもなるのだと考える。その点で、今回の運営協議の中で図らずも学んだことは我々のある種の「職業病」であったと感じる。それは、知らず知らずのうちに「新しいことを他者に教える」という一方通行の伝達の形(つまり現在においてはあまり勧められていない教育の形)になっていってしまいがちということであった。確かに今回の東京サテ

ライト主催ラウンドテーブルは東京サテライトメンバーが企画運営をしてきたが、我々は研究をされている大学の先生でもなければ依頼された講師でもない。多くの参加された先生と同じ現場の教員としてこのラウンドテーブルの機会では何を学ぶことができるかを考えた時、学ぶ者で居続けることの難しさを感じた。そして、実施後はまさに『礼記』にある「教学相長」において言われる「学びて然る後に足らざるを知り」「然る後に能く自ら反みる」機会を実感した。そして、今後我々がその学びのある種の苦しみの先の「自強」に思いを致し、今後このラウンドテーブルをどのように続けられるかが課題であると考えている。

企画段階から院生が携わって運営していくということはこれまでに殆ど例がなかったと聞く。それはこれまでの院生の方々ができなかったのではなく、様々な条件の巡り合わせで我々ができたのだらうと改めて思う。改めて、研究科長の柳澤先生、シンポジストとしてご参加くださった副学長の松木先生と信大附属松本中副校長の宮下先生、東京サテライトご担当の福島先生を初めとする福井大学教職大学院の諸先生方、ご参加くださった全国の先生方に心より御礼申し上げたい。

院生 自己紹介

2021年度の入学の院生から抱負を語ってもらいました。

自己紹介～入学にあたって～

ミドルリーダー養成コース1年／立教女学院中学校・高等学校

堀井 優



はじめまして。今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学いたしました、堀井優

と申します。現在は、東京都杉並区にある立教女学院中学校・高等学校に勤務し9年目となります。教科は保健体育です。趣味は登山やキャンプで、自然に触れることで日頃の疲れをデトックスしています。

学生時代は中学校から大学まで10年間、陸上競技中心の生活を送っていました。陸上競技を通して、自分の人生の軸となることを学び、今でも私の本質はそこで育まれたものだと思っています。教師を目指し、非常勤講師とスポーツクラブのアルバイトを掛け持ちする生活を経て、現在の学校に着任しました。着任して驚いたことは、伸び伸びとした校風とは相反し校則や制限が多く、当時部活動を頑張りたいと思っていた私にとっては悩ましいことでした。私立校は移動もなく、このままこの学校で30年以上やっていけるのか？部活が思うようにできないなら自分に何ができるのか？と漠然と考えていましたが、目の前の仕事をこなす毎日に有耶無耶になっていきました。

そんな時、東京サテライトができるタイミングで福島先生から「一緒に学びませんか？」と声をかけていただきました。日常の仕事で精一杯な私には、大学院との2足の草鞋は難しいと思っていましたが、その後、感染症拡大により世の中や教育現場は激変し、約3ヶ月の休校を余儀なくされ、オンライン用

のホームルーム準備やオンデマンド用の動画作成でPCと睨めっこする毎日を経験しました。その時は、自分が教員なのか、動画編集の仕事なのか、わからなくなりそうな気さえていました。一方で、入職当時悩んでいたことを思い出したり、「教育とは何か？」や、また今後の自分について考えるようになりました。そして大学院の学びを通して自分を見つめ直し、自分なりにその答えを探してみようと奮起、入学を決意しました。

緊張しながら参加した4月合同カンファレンスでは、東京サテライトの皆さんと協働しながら自分の考えを深めていけることの楽しさを体感しました。立場や取り巻く環境、地域などが全く違う先生方と交流することができることは本当に楽しく、この恵まれた環境の中に身を置けることは、自分の教員人生にとってターニングポイントになると確信しています。どうぞよろしくお願い致します。

教員17年目の挑戦

ミドルリーダー養成コース1年／二松学舎大学附属柏中学校・高等学校

向阪 望



この度、2021年4月よりミドルリーダー養成コースに入学致しました向阪 望と申します。教職大学院で学ぶ機会をいただいたこと、そして皆様とご縁があっ

て一緒に学ばせていただくことをとても嬉しく、感謝しております。

私は国立大学附属の中高一貫校で6年間過ごしてきました。校風としては生徒会活動など生徒の自主活動が盛んで、私も生徒会活動に取り組んできました。また、現在では総合的な探究の時間が行われていますが、当時総合学習の先進校としてカリキュラ

ムが組まれており、私もその中で学習に取り組んでいました。今振り返ると、教員としての原点が母校にあり、6年間の教育活動で培われた様々な力が私を支えているのだと思います。そして教科は数学ですが、当時担任であった数学の先生に影響を受け、数学の教員を目指そうと思ったのも中学・高校時代だったと記憶しています。

大学卒業後、東京都内の私立中高一貫校で13年間勤務を致しました。もともと女子校でしたが、共学化をし、男子生徒が入学した2年目に奉職しました。当時は男子生徒の指導が確立されておらず、学校全体としてどちらかと言えば日々生徒指導に追われていた気がします。数年が経ち、進路実績を向上させるためにコースを再編成することになり、生徒指導から教科指導・受験指導への割合が高くなって

きました。ある年に、母校で毎年行われている公開研究会に参加し授業を見学しました。その光景は私が受けてきた授業とは違い、先生が教えるというよりも、生徒が自ら考え・問題を解決する協働学習で学んでいました。私も母校のような授業を展開したいと思うようになり、そのためにはもっと専門性を高める必要があると考え、1年間大学の専攻科で数学を勉強しました。

そして現在は千葉県にある二松学舎大学附属柏中学校・高等学校に着任し、4年目を迎えました。大河ドラマ『青天を衝け』の主人公で、一万円札の肖像となる渋沢栄一さんが二松学舎の第3代舎長で、『論語』教育を柱に人間力と学力の向上を軸に教育活動をしています。昨年度、教員生活初めて中

学の担任となり、今年度は中2の担任として多感な時期の生徒たちと日々奮闘しています。義務教育を終え、半分大人な高校生とはまた違い、中学生は反抗期の真っ最中である一方でスポンジのごとく教員の指導を吸収する柔軟性を持っています。教員17年目ですが生徒から教えてもらうこと・学ぶこと・新しいことに挑戦することを忘れずに毎日授業をしています。

教職大学院では「探究活動」をテーマに学んでいきたいと思っています。学んだことを現任校に還元し、「理数探究」の授業を展開できるような学校にしたいと考えています。教員生活17年目の挑戦。2年間ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

教職大学院に入学して

ミドルリーダー養成コース1年／町田市立小中一貫ゆくのき学園武蔵岡中学校



はじめまして。今年度ミドルリーダー養成コースに入学しました内村佐保莉と申します。よろしくお願いいたします。大学卒業

後、埼玉の私立高等学校、大学付属の私立中学高等学校での勤務を経て、現在東京都の公立中学校に勤務しております。

これまでの歩みを振り返ると、すべては出会った方々のご縁により、今こうしてここにいられるのだと痛感します。新卒で赴任した私立高校では、教員としても社会人としても一から教えていただきました。特に「生徒の前では歳も経験値も関係ない。プロの教師なのだ」と教えられた日のことは今でも鮮明に覚えています。初めて赴任した公立中学校では、研修の存在を知り、私立に勤務していた頃には経験できなかった校外での学びに目を向けるように

内村 佐保莉

なり様々な出会いを得ました。当初は経験値と授業力の向上に努めていましたが、前任校で多くの先生方の対応を見たり自分自身の立場が少しずつ変わったりする中で、教科に特化していて良いのだろうか考えるようになりました。特に現在の学校に赴任してからは、生徒の実態やこれからの社会で求められる力を鑑み、総合的に物事を見て判断し他教科や授業以外の場面につなげることでできる普遍的な力が必要であるのではないかなと思うようになりました。そして同じ頃、本学園が市の教育委員会による研究指定校となり、その研究主任という立場になりました。

現在所属している学校は施設一体型の小中一貫校で、全学年が単学級という規模です。行事や集会を小中合同で行う良い伝統がありますが、「施設一体型」の域を抜けた9年間の教育を見据えた小中一貫校になるべく始まった研究。しかし私には研究主任としてのきちんとしたノウハウなんてありません。

校内研修のすべてに苦戦していた時、既に本大学院で学んでいらっしゃった先生に教職大学院での学びや先生方を紹介していただき、ラウンドテーブルも参観させていただく機会を得ました。研修を受けるうちに、これまでの実践がどのくらい生徒のためになっていたのか、今後どのような活動実践が望ましいのか、教師としての自分の役割は何なのか。と考えるようになり、2年間、こちらで学びたいと受験を決意しました。

国語科の教員ではありますが、既に身に付け活用してきている言語について、教えてあげる新しいことより、共に考え「ことば」と共に生きていく存在としてその感性を磨く一助になれることの方が必要

であり、自身の目指すべきところではないかと、今は思っています。東京サテライトのメンバーとなれたこと、今年度この教職大学院で学ぶ機会を得られたことは、今まで携わってくださった方々とのご縁があってこそです。大学院での2年間でも、多くの方と出会い多くのことを学ばせていただけることをとても楽しみにしています。それぞれ異なる立場にある先生方と連携し協働的に語り合う中で、教師としての自分自身を客観的に見つめ直すとともに、生徒のために時間を惜しまず精進し、活発に協働的探究を行い、実践と分析・検討を重ねブラッシュアップしていくことができる仲間づくりができるよう励みたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

自己紹介～3つの種をもとに～

ミドルリーダー養成コース1年／多良間村立多良間中学校 上里公人



みなさんはじめまして、令和3年度から教職大学院に参加させていただく上里公人です。教員歴は10年程度で、採用されてからは今年で6年目になります。経験年数の浅い私です

が、その分多くのことを吸収していこうと思いますので、先生方の知識・経験・情報をたくさんご教授ください。

「3つの種」を自己紹介とさせていただきます。

私は生徒の主体的な活動を中心に教育活動を行っています。学習活動、学級経営、部活動や学校行事など様々な場面で生徒が自主的に活動できるよう、種を蒔く指導を模索する日々です。学級担任をする際は、1学期の間に「クラス全体で行動を起こす楽しさ」を体感させ、学級活動を学級に所属する全て

の生徒が意欲的・主体的に行うような仕掛けにトライしています。結果としてお互いを認め、すべての活動で支持的風土を持ちながら協働をしていく集団に育っていると感じています。教科指導では身につけるべき基礎・基本の知識・技能を「課題解決のため必要不可欠な位置づけ」にすることで自然と生徒の方から考え、導き、学んでいくような「めあて」「学習課題」を設定することを研究しています。生徒同士の対話で展開する授業が多くなっています。教師側は数学的用語の確認と少しの助言・支援をします。部活指導では生徒の目標を（実現可能な範囲で）具体的かつ明確なものにし、生徒の向上心をあおりながら、集団での活動のしかたや学校生活、コミュニケーション能力など様々な力を育成しています。

現在の職場では「主体的・対話的に学び、論理的に考え、表現する生徒」を目指す生徒像とし、授業では生徒が「教わる」から「学ぶ」に意識を変えることを目標に行事等でも生徒が主となって創っていくように工夫しています。村の教育委員会など行政

の理解もあり、様々な取り組みに力を注げる環境になっています。

現職場での授業研究によって私自身の授業の組み立て方が大きく変わり、教師としてもっとたくさんの事を学びたいと思い、教職大学院に参加することになりました。教職大学院ではたくさんの先生方の実

践から自分の地区以外の教育に対する考え方や最新の教育論を得てこれからの自分または学校全体の授業や教育活動に生かすことと、ミドルリーダーとして職員間の協働を円滑にするための術を得ることを目的として学んでいきたいと思っています。

学び直し！チャレンジ 大学院！

学校改革マネジメントコース1年／沖縄県宮古島市立狩俣小学校 下地美和子



今年、福井大学教職大学院、東京サテライトで学ぶことになりました。遠く離れた離島在住ですが、有り難い機会をいただいたと感謝しております。

私は、約30年前に東京の大学卒業後地

元宮古島に戻り、小学校教諭としてスタートし、平成29年度からは教頭で本校2年目になります。これまで、小さな島の地元出身ということもあり、教職員の先生方も顔見知りが多く互いの意思疎通が図りやすく、教職員や保護者、地域の皆さんと連携をとり協働しやすい環境の中で、子ども達の教育に関わってきました。今年度は、よき校長・教職員に恵まれ、縁あって、働きながら学べる福井大学教職大学院に入学することができました。変化の激しい時代の中で生きていく子ども達に役立つ学びができる喜びと、今現在の私がしっかりやれるだろうかという不安と、新しい出会いや、新しい世界が展開される期待が、色々混ざり合っています。

昨年令和2年度から勤めている宮古島市立狩俣小学校は、私の出身校であることと、平成2年に臨時教諭として1年間勤務したという経緯があります。

本校は現在、全児童18名で、低・中・高の完全複式3学級の小規模校。複式学級の効果的な指導法や授業改善が課題です。先生方と共にどう学校の課題に対応していくのか、小さな世界の中で子供たちが健やかに成長していくために、どう学校をマネジメントしていくのか、よりよい環境づくり等が出来たらと思っています。また、小規模校であるが故に学校の課題解決の為に地域の協力も必要不可欠で、地域の方々を巻き込んだ協働体制の構築を目指しています。狩俣地区は小さいながらも独特の歴史・文化があり、児童もそれを理解し地元に誇りを持ちながら育ってほしいと願っています。そして将来子ども達がたくましく生きていくために、学校で何ができるのか、どう学校をマネジメントしていくのか、私自身もしっかり学んで、変化していかなければと思っています。

これから教職大学院では、この変化の激しい時代に、教育改革の展開を見据え、学校教育のあり方や自分がこれからどうあるべきなのか、役割は何なのか、自身を振り返りながら、研究を進めていきたいです。そして、現在の、そして今後の学校の課題解決に対応出来る学びを、大学院の素晴らしい先生方と協働的な関わり合いの中で模索し深めながら、学べることに感謝しつつ、自分自身の成長に繋げていきたいと思っています。

学びの場を求めて

学校改革マネジメントコース1年／戸田市教育委員会(戸田市立教育センター)



藤田 政貴

今年度から学校改革マネジメントコースでお世話になります。藤田政貴と申します。

私はこれまで教職を17年、行政職を5年経験してきました。教職経験においては、中学校教員(外国語)と

して、直近では「ICTの活用を通じた授業改善」をテーマに、教育事業者と連携しながら研究してきました。また、キャリア教育に興味があり、子供に夢を持たせることが学習意欲の向上につながるか研究をしました。行政職経験においては、初任者研修やミドルリーダー向けの研修を担当したり、国立情報学研究所に協力してリーディングスキルテストの初期段階の開発に関わったりしました。

本学への進学を決めたきっかけは2つあります。1つは、コロナ禍による学校における諸課題を打破する策を考えるためです。学校現場では、教職員が終結の見えない不安を抱えながら、「主体的・対話的で深い学び」等、多くの教育課題の解決に果敢に挑んでいます。その最中、今後管理職として取り組まなければならない「何か」を明確にするための学

びの場を求めてこの場にやってまいりました。

もう1つは、「学び続ける教師」の具現化です。「学び続ける教師」—よく語られる言葉ですが、自分が本当に実現できているのか常に疑問に感じていました。「経験だけで語らない、知識だけで満足しない、感性を磨き続ける教師」が私の理想です。実践や指導者・受講者の方々との対話を通して学びを追究し、理想を追求したいと考えています。

先日、4月合同カンファレンスに参加し、先輩方や受講者の方々から「熱」を感じることができました。その「熱」の源は、学びへの意欲、職場での危機感、地域への愛情等、様々でした。そして、指導者の方々からも、知と知をつなごうとされる「熱」を感じました。2日間を通して、それらの「熱」を重ね合わせることで、さらなる教育のイノベーションを生み出すことができると期待が大きくなりました。同時に、自分が熱をもっと高められるように頑張らないといけないな…と、心地よいプレッシャーを持ちました。

こちらで学んだことを元に、子供も教職員も保護者も地域もわくわくする、そして、様々な教育課題にしなやかに対応できる、新しい時代の学校をつくらせていきたいです。よろしくお願いします。

森を見ることができる管理職として

学校改革マネジメントコース1年／埼玉県立越谷南高等学校

加藤 悟



今年度から東京サテライトで学ばせていただくことになりました加藤と申します。埼玉県の理科の教員として、進路多様校、工業高校定時制、進学校と多種多

様な学校に勤務させていただきました。初任の頃から理科はこれからの社会を生きるために必要なリテラシーの一つであると考えていました。授業で学んだ知識はなくなったとしても、「理科の見方や考え方は、身に付けてもらいたい。」「理科に対する興味を持ち続けてもらいたい。」そんなことを考えながら授業を行ってきました。その後、県立総合教育センターに異動し、JICAや理化学研究所等、外部

連携機関との連絡調整、新任管理職研修の運営、総合教育センターから県立学校へ研修講師を依頼する際の連絡調整の取りまとめ等、多くの業務を経験させていただきました。特に大学の先生とともに進めていった「主体的・対話的で深い学びを実現する校内組織マネジメントに係る調査研究」では、先生たちの中に、新たな学びを進めていくための意識づくりをしていくことの難しさを痛感しました。コロナ禍と私の途中人事で、この調査研究を最後まで見ることが出来ずに、現在の勤務校に異動となってしまいました。

越谷南（こしがやみなみ）高等学校には、昨年11月から教頭としてお世話になっております。本校は、普通科8クラス、外国語科1クラスあり、生徒が約1,110名、教員が約70名の県内の中でも比較的大きな学校です。先生たちは、ICTを積極的に活用しており、全教室に設置されたプロジェクタを使って授業を行なっています。また、Google クラウドを使ってクラスの連絡や課題の配信等を行なっています。また、埼玉県立の学校でもいち早く学習用端末の生徒購入を決めました。現在、1、2年生でその端末を使った新たな学びの挑戦をはじめようとしています。

探究活動にも力を入れており、総合的な探究の時間は、グループごとにテーマを設定し、調べ学習を行っています。この時間は、クラス担任だけではなく、今年度から全ての教員が関わることになる予定です。他にも、来年度からPISA型読解力の育成を目指した取り組みや、生徒が自ら意欲をもって学ぶ力を身に付けさせる取り組みを行う予定です。

着任して半年が過ぎようとしています。木（県への報告やその場の対処）ばかり見ていて森（組織全体）が見えていないような恥ずかしい状況です。管理職として、先生たちが学び合える環境やそのための組織づくりができるよう勉強していきたくと考えております。教職大学院の先輩の皆様、同期の皆様よろしくお願いします。

着任して半年が過ぎようとしています。木（県への報告やその場の対処）ばかり見ていて森（組織全体）が見えていないような恥ずかしい状況です。管理職として、先生たちが学び合える環境やそのための組織づくりができるよう勉強していきたくと考えております。教職大学院の先輩の皆様、同期の皆様よろしくお願いします。

スタッフ 自己紹介

出会い

福井大学連合教職大学院 東京サテライト コーディネートリサーチャー 平良善信



令和2年度福井大学連合教職大学院・宮古島市教育委員会の連携協定締結に伴い、本年度より、コーディネートリサーチャーとして勤めることになりました平良善信（たいらよし のぶ）と申します。

東京サテライトの院生の皆様の学びを全面的にサポートするとともに、宮古島において福井大学教職大学院の「学びのネット

ワーク」の拡大を図り、島内の教育の振興・発展に寄与できるよう尽力して参ります。

本題の自己紹介ですが、33年間の教職生活（教諭10年、管理職12年、教育行政11年）においてターニングポイントになった出会いを紹介し、自己紹介に代えさせていただきたいと思います。

私は、大学卒業後、自分探しの旅（アメリカで1年間の留学・遊学？）に出ましたが、帰国後もキャリアが定まらず、とりあえず塾講師として勤めていました。そんな中、ある塾生から「先生が本当の学校の先生（塾生の通う学校）だったらいいなあ」と言われたことをきっかけに、公立学校の教諭になる

ことを決意しました。その後、33年間の教職生活を歩んできましたが、その中で大きな出会い（ターニングポイント）が3つありました。

1回目のターニングポイントは、教職1年目の夏でした。当時は、教育実習生として2週間実習した以外は学校現場での経験がなかったこともあり、日々、何をどのように指導したらよいか分からず悩んでおりました。そのため、自己の指導方法を根本から見直し改善したいと思い、O先生（現 琉球大学名誉教授）の研究授業を参観させて頂きました。実際に参観し、コミュニケーション能力の育成を直向きに目指し、student-centered learning で授業実践なされていたO先生に衝撃を受けました。さらに、英語を学ぶことに対し生徒の興味・関心を高める様々な取組（例 自宅の留守番電話に英会話を毎日吹き込んで視聴させる課題や学んだ語彙や文法を活用させる英語5行日記の作成等）にも感銘を受けました。O先生との出会いを機に、O先生が提唱する「英語教師」ではなく「英コ（コミュニケーション）教師」を目指すようになったことが、第1回目のターニングポイントです。

2回目のターニングポイントは、中3の担任として勤務している時のK教頭との出会いです。夜中でも厭わず、担任と一緒に家出している生徒達を探してくれたK教頭の態度・思いやりに胸を打たれました。陰日向なく部下を支えてくれたK教頭へ

の恩返しとして、いつかは苦悩している後輩を支援できる管理職になりたいと思ったことが、2回目のターニングポイントです。

3回目のターニングポイントは、福島教授との出会いです。福島教授の後進を育成することへの情熱と神がかった行動力に心を揺さぶられ、本職に就くことを決意しました。当然のことですが、福島先生に出会うことがなければ、私自身がこれまで主催していた教育行政主導の研修会の在り方を見直すことも、また、宮古島の教師の成長にとって必要される最適な研修システムやコミュニティを再構築し、島の教育振興・発展にもう一度一役買いたいという思いに駆られることもなかったと思います。

「コミュニティ・オブ・プラクティス」の序章に「人と人との結びつきの中には、宿命的なものがある。十分な時間と人脈を与えられれば、必然的に出会い、同じ情熱を共有することを発見する人たちがいるものだ」と記されています。まさに、33年間の教職人生を振り返った時、このフレーズが心に刺さります。今年、4月よりコーディネートリサーチャーとして第1歩を踏みだしましたが、これから全国の多くの院生の皆さんに必然的に出会い、カンファレンスやラウンドテーブルを通して情熱を共有し、教育を熱く語り合っていきたいと思います。よろしくお願い致します。

教育にかかわれる幸せ

福井大学連合教職大学院 東京サテライト コーディネートリサーチャー 前田香織



私は、この3月で、37年間勤めていた東京大学教育学部附属中等教育学校を定年退職しました。当初の予定では、退職後は田舎の方に家と畑を買い、のんびりと老後を過ごす準備をするつもり

でした。しかしながら、最後の1~2か月で急転直下、非常勤講師として残留することになってしまいました。3月にさよならを言った生徒たちに、4月に新任講師としてあいさつをし、笑いを取ってしまいました。

さらに、福井大学東京サテライトのコーディネートリサーチャーという、これまた予想外のお仕事を引き受けてしまいました。のんびり老後を過ごす

いう予定とはかなり違ってしまいましたが、前向きに頑張ろうと思っています。

私は、新卒で赴任したまま1つの学校に定年まで居続けるという今ではあまり例のない教員生活を送ってきました。これからは、さまざまな学校の先生方の活動を知ることができることが、とても楽しみです。

私が勤務してきたたった一つの学校「東大附属」でも、長い間には様々な変化がありました。「国立大学附属学校」である意義を発信し続けなければならないことと、教育学部との結びつきが強かったことで、さまざまな新しい取り組みに関わることができました。私が経験してきた学校の変革や私自身の取り組みについて、簡単に以下に述べます。

浦野東洋一先生が校長として来られた時に「開かれた学校作り」を推進され、三者協議会が開かれるようになりました。教員が一方的に学校を運営するのではなく、生徒や保護者の意見も聞こうという民主的な学校運営を行う取り組みです。学校を開くというのは教員にとってたいへん怖いことで、生徒や保護者の意見を公開の場で直に聞くというのは勇気のいることでした。実際にやってみると、最後は良いところに着地しすっきりするものだということがわかりました。

佐藤学先生が教育学部長をされた時には、「学びの共同体」がトップダウンで導入されました。職員会議で「先生方の哲学を変えてください」と言われた時には衝撃が走りました。それまではなかった大職員室が作られ学年ごとに机を区切り、月に1回学年での授業研究が行われ、すべての教員が年に1回は授業を開くことが課せられました。教科の壁を取り払い、生徒の姿・学びを教員全員で見る、教師は教えるのではなく生徒の学びに寄り添う、拾う、つなぐ、もどす、同僚性を築く等々を言われ、年配の教師の抵抗もありましたが、生徒は静かにやわらか

くおだやかになり、学校の雰囲気も変わりました。その後、目指したわけではないですが、進学実績も伸びていきます。

「学びの共同体」では、教師は「しゃべらない」「黒板に書かない」と言われ、いったいどうやって授業をすればいいのか、と最初は悩みましたが、新しく赴任してきた同室の同僚がさらに過激な授業をしていました。彼が出張の時に教室に行くと、黒板を使って熱心に議論をしているグループ、机をあわせている取り組むグループ、個別にやっている生徒、それぞれ様々に自主的に学習に取り組んでいる姿を見て衝撃を受けました。教員がいなくても、生徒自ら進んで学習するのは理想の姿だと思いました。これは、上越教育大の西川純先生の「学び合い」という授業スタイルだと聞き、目下のところ、一人も取り残さない授業を目指し、「学び合い」に取り組んでいます。

最後に、教員最後の10年間は「生物部の顧問」の活動に最も時間を費やしてきました。学校としてSSHを申請しなかったのも、JSTの「SPP（サイエンスパートナーシップ）」「中高生の科学部活動振興事業」「中高生の科学研究実践活動プログラム」や財団の助成金等を受け、生徒の探求活動を支援しました。生徒の主体性を大切に、専門の助言者と活動場所、活動時間、実験器具や実験材料、を確保すれば、生徒は自らどんどん探求を進めていくのだということを実感しました。

4月から福井大学教職大学院に関わり、短い間ですが、知れば知るほど、これは実践者としての教師の実力がつくシステムになっていると感動します。私も現役の時にここで学びたかったと思いました。私では力不足だと思いますが、学びながら、先生方の実践に寄り添ってこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

★★次ページ～東京ラウンドテーブルのチラシ、開催前に実施したアンケート集計結果等の資料を掲載★★

2020福井大学東京サテライト ラウンドテーブル

主催 福井大学連合教職大学院 東京サテライト

日
時

2020年

11月21日



10:00-15:30

ZOOMミーティングで開催

ICTで探究と協働はどう育まれるのか？

これからの学習について、従来の「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」の視点も重視され、例えば新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が提示されました。予測困難の時代に「他者と協働しながら目的に応じた納得解」を見出すことが求められています。

そのツールとしてのICT技術の教室への導入は、コロナ禍で促進されました。しかし、教員のICT技術への熟達は、OECD調査の中で日本が低い位置にいるというデータもあります。この状況下で昨今の教育のキーワードになっている「探究」「協働」を教室の中でどのように成立させるのか。そして学びをICTを通してどのように考えることができるのか。

お互いに直面している悩みを打ち明けあいながら、大切にしたいこと、しなければならないこと、できること、できないことは何かを見据えていく協議を進めたいと考えます。

シンポジウム

第1部



松木 健一

(福井大学大学院理事・副学長)

国立大学法人福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長を経て現職。



宮下 哲

(信州大学教育学部附属松本中学校副校長)

福井大学教職大学院准教授、長野県教育委員会事務局北信教育事務所主任指導主事を経て現職。

ラウンドテーブル

第2部

「ラウンドテーブル」は、4～5人ずつの小グループでテーブルを囲みながら、自分の実践を持ち寄り傾聴し、語り合う場です。参加者が自身の活動を省察すると同時に他者の実践を丁寧に聞き取るという交流の中で、これまでの固定観念や役割・常識から離れて新たな可能性を探っていく営みです。校種や職種、立場の違いを超え、気づきや学びを互いに提供する対話によって、認識を深めていくことを目的とし、シンポジウムを基調にこれからの教育を考える着眼点となりそうなテーマを4つ設定しました。そうした学び合いを通して明日へのヒントを見いだしていきたいと考えます。

参加申し込み
〆切11月15日(日)



※分科会を選び、必要事項を入力してください。
※第1部のみ、第2部のみ参加も可能です。

PC・スマホから右の
申込フォームをお願いします。 <https://forms.gle/gidu9Y39nK2Srfv9>

お問い合わせ
dpdt.fktk@gmail.com

タイムテーブル

9:00～

接続開始

第1部

10:00

オープニング・事務連絡

全体交流

10:30～12:00

シンポジウム「ICTで探究と協働はどう育まれるのか？」

松木健一(福井大学大学院理事・副学長)・宮下哲(信州大学教育学部附属松本中学校副校長)

12:00～13:15

昼食・休憩

第2部

13:15

諸連絡

13:30～14:45

ラウンドテーブル「個々の実践報告を傾聴し、深め合う」

参加申し込みの時に以下のA・B・C・Dいずれかを選んでいただきます。

各分科会にわかれて、テーマについての思考を深める場です。

15:00

全体共有

15:30

終了

A

「教育のICT化による課題とうまく付き合う」

GIGAスクール構想により、小・中学生は今後1人1台のパソコン配置が実現されます。ICTは情報収集、データ分析、遠隔地とのコミュニケーションにおいて優れています。しかし学校内での環境が整っていくと、教員にも子どもたちにも、苦手意識や力量不足、正しい情報知識の後追いによって別の問題も生じるでしょう。

この分科会では、今の時代に必要不可欠となったICT活用とどのようにうまく付き合い、未来に向かっていくのかを探っていききたいと思います。

B

「学校組織が乗り越えるべきことを考える」

チーム学校としてICT技術の導入や普及を進めるなかで、さまざまな組織的課題に直面している学校も少なくないでしょう。それらの課題を乗り越えるために、そして、ICT技術が特別なものではなく日常のものとして学校内に広がるために、私たちにはどのような取り組みができるのでしょうか。

この分科会では、参加したみなさんの学校がもつ組織的課題や実践例を共有して議論しながら、ICT技術をそれぞれの学校の日常に根付かせるためにできる取り組みの可能性を探りたいと考えます。

C

「ICTの長所・短所を理解し、使いこなす」

ICT化によって、教育効果や効率が上がる部分、逆に費用対効果が見込めない(従来の方法が適している)のはどの部分でしょうか。当然のことながら、万能のツールは存在しません。優れたツールを使いこなしていくカギは、その長所に合った場面で活用し、有効でない場合には他の方法を選択する「分別」にあります。

この分科会では、ICTがどんな学びを得意とし、逆に苦手とするのはどんなことなのかを皆さんと議論し、整理することで、明日からの教育実践のヒントを得ていくことを目指しています。

D

「デジタルネイティブの内面を探る」

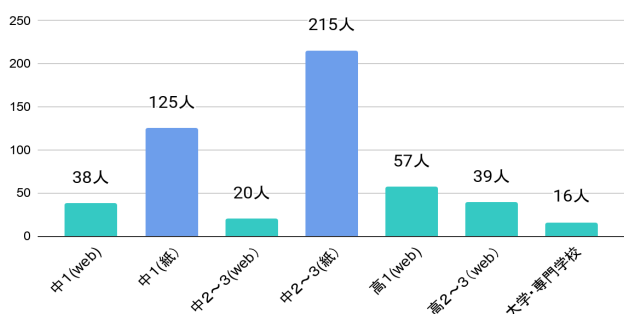
「ネオ・デジタルネイティブ」とも呼ばれる現在の幼児・児童・生徒は、ICTとの共生が自然に成立しています。そうではない教員との「ずれ」はどのように存在するのでしょうか。また、その環境下で子どもたちの生活・行動・思考はどのようにあるのでしょうか。喜怒哀楽は共有されるのでしょうか。子どもたちの感覚や認識を理解しようとする中で、教育は成り立つのではないかと考えます。

この分科会では、私たち大人も自身の省察を行いながら、子どもの学びを深めるための糸口を探りたいと考えます。

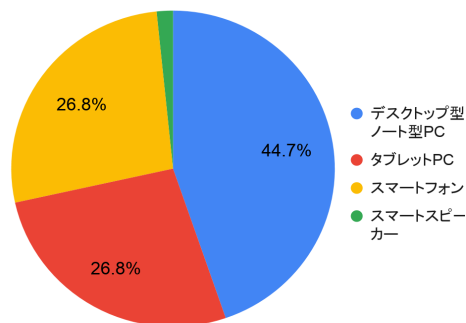
＜デジタルネイティブの実態調査＞（R2.10.28～11.20実施）

「デジタルネイティブ」と呼ばれる世代の実態を探るべく、都内在学の中高校生および首都圏の大学・専門学校等に通う学生（計170名）を中心にGoogleフォームを用いて行ったアンケート、および同様の内容を新潟県の中高校生（計340名）に質問紙を用いて行ったアンケートの結果

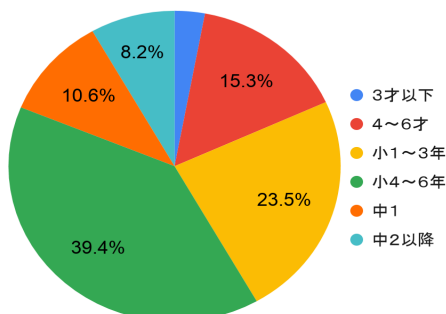
回答者(510名)の内訳



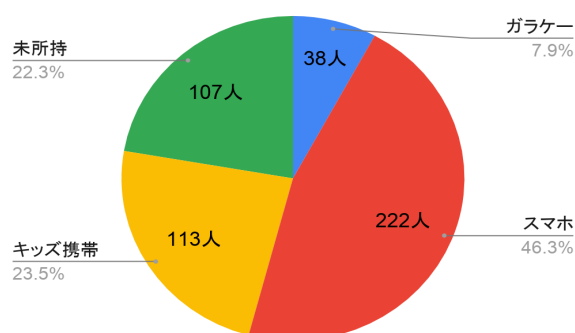
最初に使用するようになったICT機器(web回答のみ)



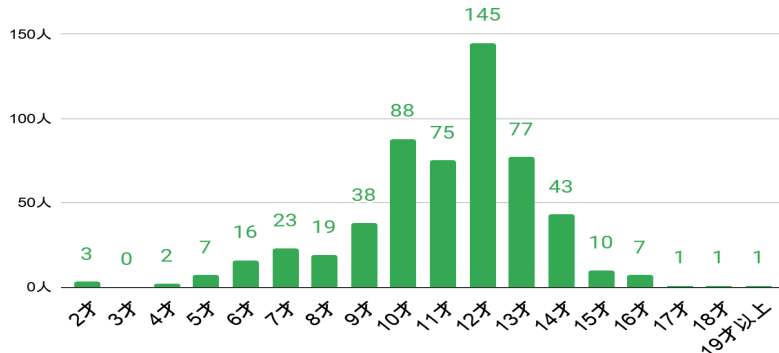
ICT機器を使い始めた時期(web回答のみ)



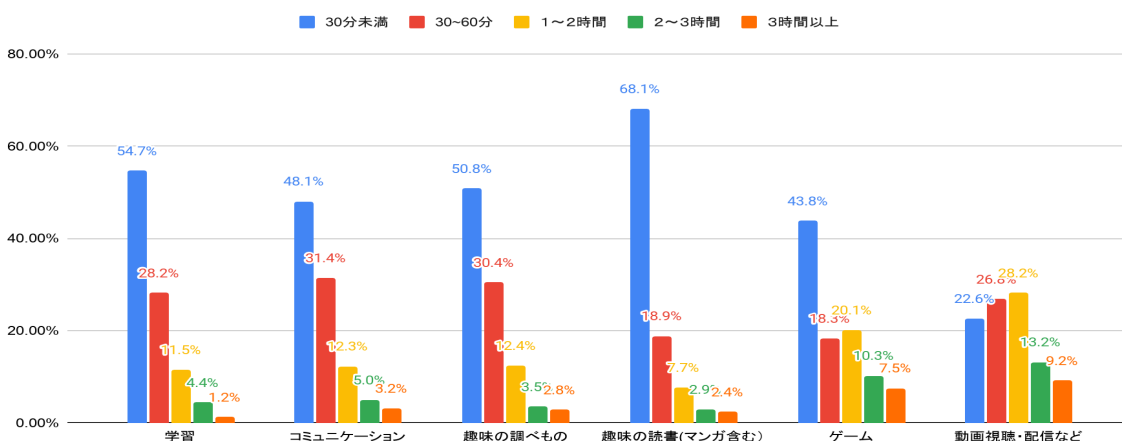
最初に所持した携帯電話の種類



自分の携帯電話を所持し始めた/始めようと考えている時期



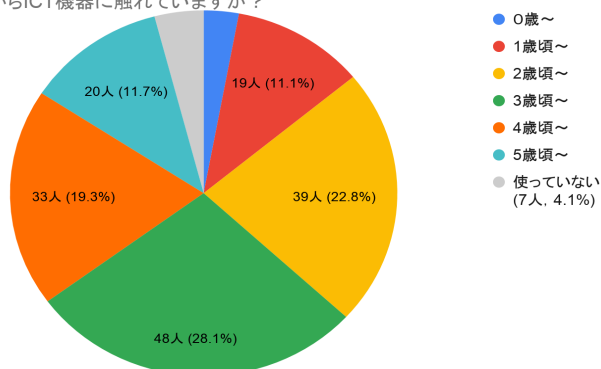
次の目的で、一日当たり平均どのくらいICTを利用しますか。



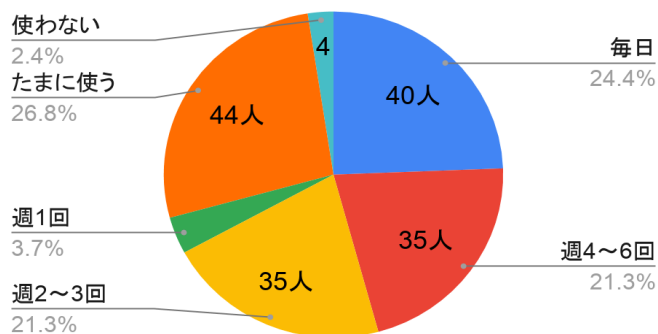
<家庭での幼稚園児のICT利用>（アンケート実施：R2. 10. 30~11. 17）

首都圏の幼稚園に子どもを通わせている保護者（171名）を対象に、Googleフォームを用いたアンケート調査の結果

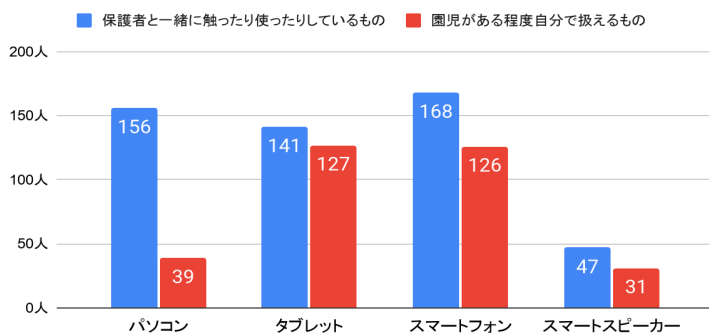
何歳頃からICT機器に触れていますか？



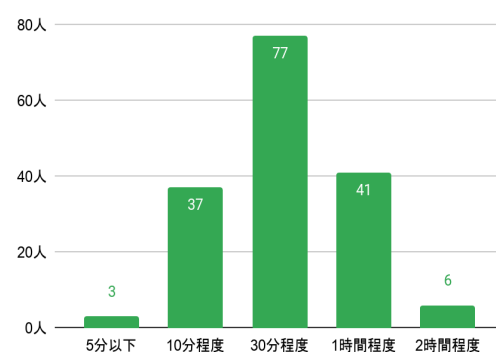
ICT機器をどのくらいの頻度で使っていますか？（回答数164）



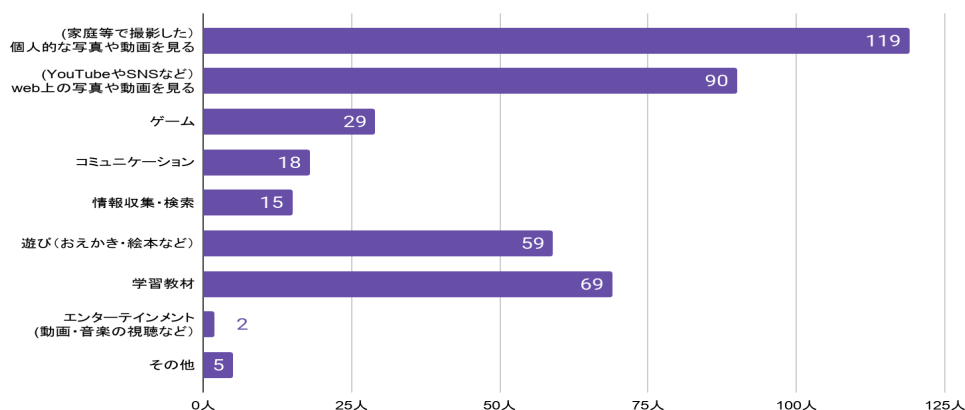
保護者と一緒に触ったり使ったりしているものと園児がある程度自分で扱えるもの（複数回答可、回答数164件）



1回あたりの平均使用時間（回答数164）



ICT利用の主な目的（複数回答可、回答数164件）





【編集後記】Newsletter 増刊号をお届けいたします。昨年度は「再出発カンファレンスにかえて」として2号にわたって臨時増刊号を発行いたしました。今回、東京サテライト特集号を編みながら、昨年度のことにも思いを馳せ、臨時増刊号は熱量が溜まってあふれ出てくるものだと改めて思いました。東京サテライトの歩みを振り返り、意味づけ、教職大学院の実践に位置づけ、次に繋げようとする熱量の大きさを感じ取っていただけることと思います。「より広い実践・省察・研究を編み、新しい公教育を支える力を培う協働の企図」（柳澤昌一 NL146 号巻頭言）の重層的なサイクルが動き出しています。

教職大学院 Newsletter **No.148**

2021.5.29 内報版発行

2021.8.2 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp